

FORUM

Vol.25

大阪府立大学
高等教育開発センターニュース

「フォーラム」

第25号

CONTENTS

巻頭言 2

高等教育推進機構副機構長
山口 義久

コラム 3

入試改革に思う

国際交流推進機構 国際交流課長
石橋 正州

授業報告 4

高等教育推進機構 准教授
清原 文代

学生調査データ分析報告 5

府大生の2つのライフとアクティブラーニング

2014年度活動報告 6

高等教育開発センター

学生FDスタッフ活動 7

編集後記 8



大阪府立大学
OSAKA PREFECTURE UNIVERSITY

巻頭言

● 高等教育推進機構副機構長

山口 義久

YAMAGUCHI YOSHIHISA



山口 義久 YAMAGUCHI YOSHIHISA

高等教育推進機構副機構長

1949年生。1978年京都大学大学院博士課程満期退学。同年大阪府立大学総合科学部助手。同学部講師・助教授・教授を経て、2005年総合教育研究機構教授。専門はギリシア哲学。文系・理系の区別がない時代の知のあり方が研究テーマ。

組織的FDと個人的FD

本学で本格的にFD活動が始まったのは、統合・法人化の平成17年度からである。そのとき高等教育開発センターが作られてから10年の間に、FDという概念は大学の中で完全に市民権を得たように見える。この場合のF=facultyは、「学部」と訳される場合のような、ある機能を果たす教員集団を指しているが、本来の意味に遡れば「能力」であり、D=developmentは、「発展」、「発達」と訳される言葉である。そこから私なりに考えてみると、envelopが「包む」ことを表わすのとは対照的に、developは包まれたものをくり広げることを表わしているため、faculty developmentとは、われわれが持っている能力を、顕在化し、発展させることだと理解することもできよう。

その意味では、FDの基本は個人の活動である。大学でFDと言い出す前から、各自の教育の場でいろいろなFDが行なわれていたはずである。それに対して、大学として行なわなければならないのは、組織的なFDである。個人的な活動としてのFDと、組織として行なうFDが、無理なく結び付けばいいが、現実にはそう簡単にいかない。

私自身の経験を言うと、シラバスなるものを初めて書かされたのは、以前非常勤講師として教えていた私立大学においてであった。新しい内容の授業を受け持ったという事情もあり、毎回の授業の内容を書くことは、私自身にとっても、講義計画を明確に意識するのに役立つ記憶がある。本務校でも、各回の講義にメリハリをつけることができるようになった。これは、シラバスを書くこ

とのFD効果の一例である。

これを組織的に行なうとき、個々の教員がそのようなFDの有効性を実感しながら実行できれば問題は生じない。そうでなければ、「やらされている」感じがつきまとう。もちろん、最初はそう感じても、実践しているうちに効果を実感する場合もある。そういう場合があることが、FDを個人任せにせず、組織として行なう意義の一つであろう。そうでない場合は、たんなる形式だけのFD活動になってしまう。言わばアリバイ作りのFDである。FDを教育改善につなげることが本来の目的であることからすると、本末転倒とも表現できる。このような形骸化は、組織的なFDにも個人的なFDにも起こりうる。

FDが本末転倒にならないためには、何が必要であろうか。個々の教員が教育に真摯に取り組む姿勢さえあれば、さまざまなFDの手法の有効性も見えやすくなるように思われる。統合前に、ある学部の先生と話していたとき、この学部では誰も教育のことを考えていないと言われて驚いたことがある。その言葉にはもちろん誇張もあったであろうが、そのことを思い出すにつけ、FDの根本は意識改革だと思われるし、本学の教員の意識改革も進んだと感じる。

FDの手法も次々開発され、進化している。どのような手法に力を注ぐかは、本学の現状をふまえて判断する必要がある。ただ、どのようなやり方をとるにせよ、教員の教育に対する姿勢が成否を左右するのは間違いない。アリバイ作りのFDに堕したら、FDの進化から取り残されてしまうであろう。

入試改革に思う

文科省が共通一次導入以来 40 年振りの大学入試改革を目指しており、昨年 12 月に中教審の答申が出されました。入試制度という事では、前の会社で英国に 8 年間駐在し、子供達が大学を受験しましたが、英国は大学毎の学力テストが無く、中学・高校でのテスト（成績）を基準とするシンプルな入試制度です。その特徴は以下の通りで、一部、中教審の答申と似ている面もあります。

①中学では 10 科目程度専攻するが、全国統一の学力テスト（GCSE）が卒業時に行なわれ、その結果は修業の資格となり、将来の大学入試の一次選考の要素となる。

②高校（2年間）では通常 2 度の全国統一の学力テスト（GCSE-A レベル）があり、その成績で高校の修業及び志望大学への入学の可否が決まる。

③学生は志望大学（学科）に願書を出し GCSE や高校の成績、（有名校は）面接などで一次選考が行われる。学生は一次選考にパスした大学（学科）の要求する 3～4 科目について、A レベルテスト（の累計）で各々の科目で要求されるグレード（90%以上 A*I-スタ、80%以上 A、70%以上 B、60%以上 C 等々で、大学（学科）毎に公開されている）を達成すればその大学に合格できる（他人との競争ではない）。

毎年大学毎に入試問題を作成することも無く、センター試験や各大学での学力テストも実施されないので教職員の負担は少なく、また出願から合格通知まで手続きはほとんどオンラインで行われています。

中教審の答申は「新しい高校学力テストの導入」、「丸暗記ではない合教科型の新共通テスト」、「各大学では個別学力テストではなく論文・面接で選考」、「読む・聴く・話す・書くの 4 技能を評価する英語試験」、「一点刻みでなくゾーン評価」などですが、この答申は一見今以上に複雑でコストがかかり、学力の担保も不透明なように思えます。「高校学力テスト」は②に似ていますが直接は大学入試判定に利用されないそうです。割り切って英国のようにこれで合否判断をすれば、効率もよく、学力も担保されます。また、思考力・判断力などについては英国では一次選考の面接などで評価しているようです。英語は TOEFL などを活用すれば入試テストは不要となり、また、高校生の聴く・話す能力は向上するので大学での授業も違ったものとなり、留学もし易くなります。とにかく官公民挙げて入試に費やしている膨大なエネルギーとコストを削減し、それを授業の充実・改革、大学運営の改善に回すことができれば FD の進展にも繋がるのではないのでしょうか。

グローバル化に対応し、思考力重視の人材育成を目指す中教審の答申ですが、今後詳細が具体的に議論されて、英国や他の国々の状況も踏まえて日本なりの新しい制度が構築されるものと思います。社会に変革を興し日本の繁栄に繋がる大改革となるように期待を持ってその行方を見守っていきたいと思います。

石橋 正州

ISHIBASHI MASAKUNI 国際交流推進機構 国際交流課長

1975年神戸大学経済学部卒業後パナソニック株式会社に勤務。主として映像機器、サテライト・ケーブル関連事業中心に事業企画・商品企画・営業などを担当。1998年から8年間英国に駐在。2012年4月より大阪府立大学国際交流課長。



私の授業には欠かせない Learning Management System

清原 文代

(高等教育推進機構 准教授)

1. はじめに

筆者は1～2年次生に対する初修外国語科目の中国語を担当している。筆者はLearning Management System(授業支援システム、以下LMS)が本学に導入された当初から使用しており、本稿では現在筆者がどのようにLMSを利用しているかを紹介する。

2. 自学自習を支援する場として

2.1 オープンエデュケーション教材の利用

授業では学生と教員がいるからこそできる双方向性のある活動を重視したいが、初修外国語は0から積み上げていくので、語彙や文法に関する知識を教授するいわゆる講義の部分はどうしても必要である。授業時間を有効に使うために、ネット上のオープンエデュケーションの一つである東京外国語大学言語モジュール⁽¹⁾を使用し、授業の進行に合わせてLMSから必要な文法事項のページにリンクを貼り、学生に自習を促している。2年次生向けのクラスでは東京外国語大学言語モジュールを利用した反転授業も試みている。

2.2 自作教材の配布

初修外国語の最初の難関は語彙を憶えることである。地道な反復練習が欠かせないため、QuizletというWebサービスを利用して必修単語集を作っている⁽²⁾。Quizletは簡単な操作で合成音声付きの単語カードを作成することができ、テストやゲームといった機能もある。毎回の授業で単語集の中の一定の範囲を指定し、LMSからリンクを貼って予習を課し、翌週の授業中にその範囲について手書きの自己採点のテストを行なっている。

また、筆者はプリント教材をよく配布するが、以前であれば「欠席してもらっていません」「なくなりました」という問題が起こることがあった。著作権の関係で既存の書籍をコピーしたものはアップロードできないが、自作のプリント教材であればLMSに教材のPDFをアップでき、この問題から解放された。幸い筆者はCALL教室で授業をしているので、当日プリント教材を忘れた学生に対して「授業支援システムに入って教材を見なさい」ということも可能だ。

3. 記録と連絡の場として

3.1 授業の記録

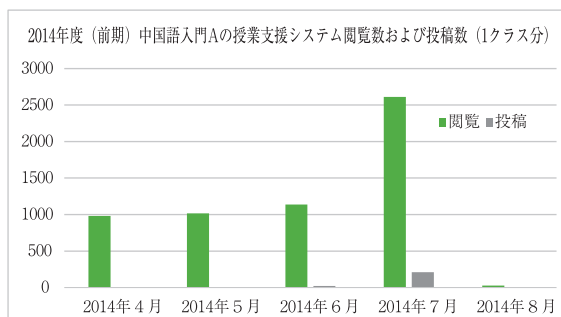
高等教育推進機構のWebサーバ上にある自分のWebサイトにブログを設置し⁽³⁾、毎回の授業の進度、教科書には記載がなく口頭で補充した事項のまとめ、予習課題、次回の予定などを記録し、LMSから当該記事へリンクを貼っている。以前は学生を指名した時に「どこが宿題だったかわかりません」という答えが返ってくることがあったが、授業の記録をLMSに入れるようになってからはこうした反応がなくなった。

3.2 テスト範囲などの通知

テスト範囲や問題形式などについてもLMSに書き込んでいる。これによって学生の間には正確な情報が回ることになり、テスト範囲の問い合わせに個々に対応する必要もなくなった。

4. おわりに

LMSは学生にとっても筆者にとっても当該科目の情報とコンテンツが一箇所で見られる場である。LMSに情報やコンテンツを入れていく手間はあるが、LMSは筆者の授業にとって欠かせないツールであり、今後も利用していくだろう。



筆者が担当する2014年度前期の1年次中国語クラスのアクセス記録、4月から毎月1,000回程度のアクセスが続き、期末試験のある7月には倍以上になっている。

(1) <http://www.coelang.tufts.ac.jp/mt/>

(2) http://www.las.osakafu-u.ac.jp/~kiyohara/JACLE_Kansai_2012_Quizlet/

(3) <http://www.las.osakafu-u.ac.jp/~kiyohara/cgi-bin/sb/>

学生調査データ分析報告

府大生の2つのライフとアクティブラーニング

本学では、IRを通じて大学教育の質保証を目指すことを目的として学生調査を行っています。アンケート調査では、学生それぞれに大学での学習状況と学生生活に関する満足度を自己評価してもらい、教育の成果を測定することになっています。

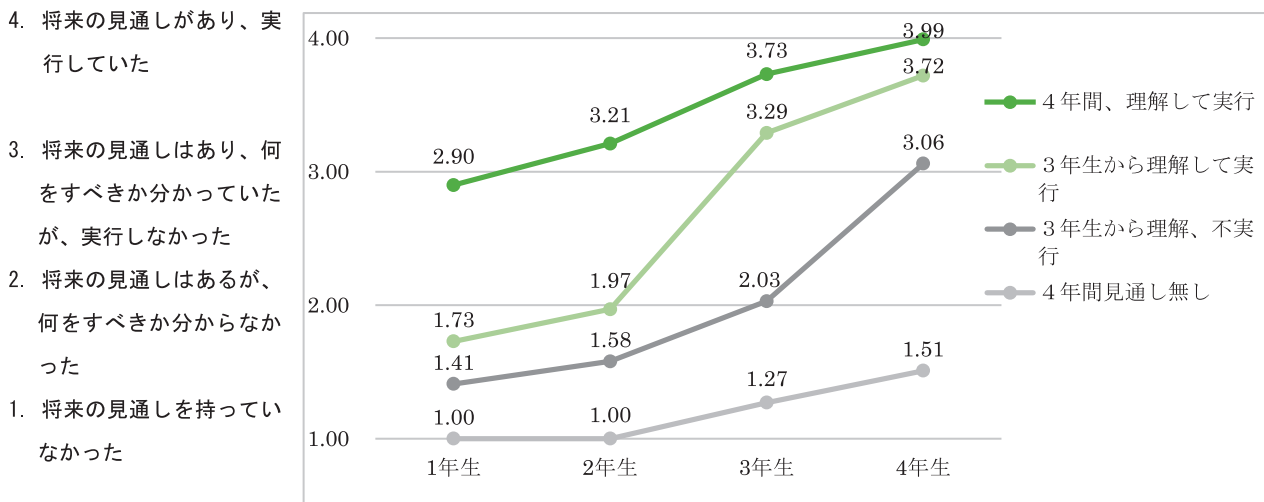
今号では、『府大生は1～4年生にかけてどの程度変化するか』報告書(2014年5月刊行)より、2点のデータを抜粋して報告します。

府大生の「2つのライフ」(キャリア意識)の4タイプ

キャリア意識が高いことは、単に将来の見通しを持つことだけを指すのではなく、日常の生活世界のなかで、将来の実現に向けて何をしたらいいかを理解し、それを行動に移して努力している状態までを併せて指します。

このグラフは、「卒業予定者アンケート2012年」の質問項目(Q1)「あなたは、自分の将来についての見通し(将来こういふ風でありたい)を持っていますか。」と、(Q2)「あなたは、その見通しの実現に向かって、今自分が何をすべきなのか分かっていますか。またそれを実行していますか。」の評定を組み合わせ、1～4年生の得点を使用して2つのライフの4タイプを示したものです。

図1 階層クラスタ分析(Ward法)の結果得られた府大生の2つのライフの4タイプ

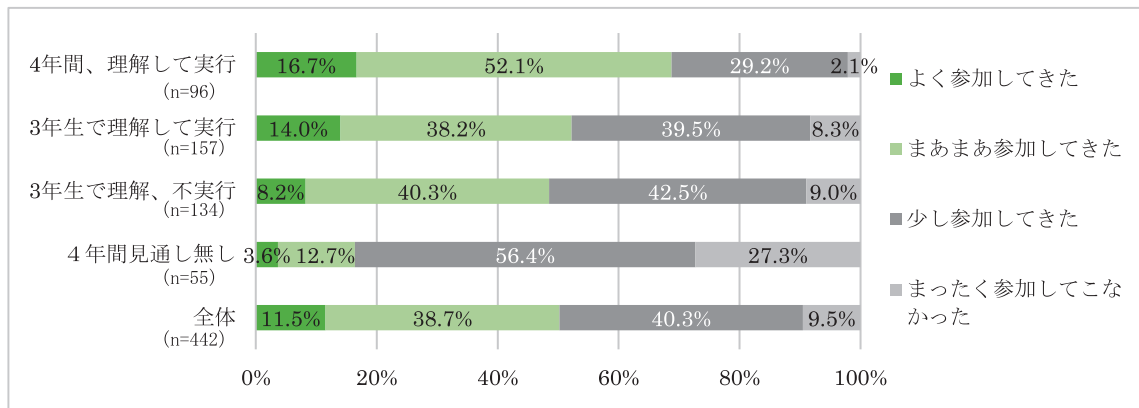


注：グラフ作成時に、Q2の選択肢番号を1⇒4から4⇒1に逆転処理を行った。

2つのライフとアクティブラーニング

「卒業予定者アンケート2012年」の間4.8「入学時より振り返って、あなたはある問題を考えたり、発表したり、ディスカッションをしたりする参加型の授業や演習にどの程度参加してきましたか」の回答を、2つのライフの4タイプとの関連で分析しました。

図2 2つのライフとアクティブラーニング型授業への参加



京都大学と(財)電通育英会による全国調査結果(2010)と同様に、府大生にも2つのライフによる分析が有効であることが分かります。そして、アクティブラーニング型授業への参加と、キャリア意識の2つのライフには関連があると言えます。(深野)

高等教育開発センター

2014年度活動報告

セミナー・研修会等の実施

セミナー・研修会等	内 容	年 月 日
新任教員 FD研修	「学生調査から見た府大生の現状と課題」 「教務に関する各種業務について」 「授業における ICT の活用について」 「授業を育てる」	2014/4/3
ワークショップ	「より良い学びを促すシラバスの作成方法」 大阪大学教育学習支援センター副センター長 大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部門 准教授 佐藤 浩章氏	2014/7/4
FDセミナー 「大学教育再生加速プログラム」 (AP事業)	「アクティブラーニングとしての反転学習」 関西大学教育推進部 准教授 森 朋子氏	2014/10/20
FDセミナー 「大学教育再生加速プログラム」 (AP事業)	「単位の実質化とIRの役割」 北海道大学高等教育推進機構 教授 細川 敏幸氏	2014/12/8

学習・教育支援サイト（ポートフォリオ）の運用

学習と教育の継続的自己改善などを支援するための「学習・教育支援サイト（ポートフォリオ）」の運用を行っています。学域生には、本サイトで半期毎に「半期学習目標」「授業ふり返り」「半期ふり返り」を入力してもらい、また学部生・院生には「授業ふり返り」を授業アンケートとして回答してもらっています。本サイトは、学生の学習ポートフォリオとしての役割を担うだけでなく、授業担当教員による授業分析や学生アドバイザーによる学生指導に役立てられるようになってきました。また、授業時間を利用して「授業ふり返り」の入力を行う場合に、入力がよりスムーズになるよう、来年度に向けてシステムの改修を進めました。

教学 IR への取組

- 大学 IR コンソーシアム
- 平成 24 年度大学間連携共同教育推進事業「教学評価体制（IR ネットワーク）による学士課程教育の質保証」

「大学 IR コンソーシアム」は、平成 21 年度から 23 年度まで採択された文部科学省「戦略的大学連携支援プログラム－相互評価に基づく学士課程教育質保証システムの創出-国公私立 4 大学 IR ネットワーク」が発展したもので、現在（平成 27 年 3 月）本学を含む 40 大学が参加しています。また、8 大学（北海道大学、お茶の水女子大学、琉球大学、大阪府立大学、玉川大学、同志社大学、関西学院大学、甲南大学）で取り組んでいる平成 24 年度に採択された大学間連携共同教育推進事業「教学評価体制（IR ネットワーク）による学士課程教育の質保証」とも連携を図り、採択期間終了後もその事業を継続的に発展させ、わが国の高等教育機関での教学評価コミュニティを育成することを最終目標としています。

【詳細はこちらに掲載しています。】

大学 IR コンソーシアム：<http://www.irnw.jp/>

教学評価体制（IR ネットワーク）による学士課程教育の質保証：<http://8gp.high.hokudai.ac.jp/>

学生調査の実施

大学運営や教育改革の効果を検証するために学生調査を行いました。それを大学内の様々なデータに加え、IR を通じて質保証に結びつけることを目指しています。

一年生調査・上級生調査・卒業生調査は上記の 8 大学連携事業の一環として実施（一年生調査・上級生調査は大学 IR コンソーシアムの調査としても実施）、卒業予定者アンケート・修了予定者アンケートは大学独自で実施しています。

学生調査の結果（件数・集計）および、完成した分析報告書は、FD に関する全学委員会で報告するとともに、センターのウェブページに掲載しています（学内限定）。

◎一年生調査の実施（2014 年 10 月 2 日、11 月 4 日～11 月 26 日）

◎上級生調査の実施（2014 年 8 月 8 日、9 月 26 日～10 月 20 日）

◎卒業予定者アンケートの実施（2014 年 10 月 1 日～2015 年 1 月 19 日）

◎修了予定者アンケートの実施（2014 年 11 月 1 日～2015 年 2 月 13 日）

◎卒業生調査の実施（2014 年 9 月 17 日～10 月 31 日）

「大学教育再生加速プログラム」(AP 事業) の取組

本学は大学教育再生加速プログラムに「アクティブ・ラーニング」と「学修成果の可視化」の複合型で応募し採択されました。今年度から平成 30 年度まで 5 年間補助が続きます。

本学ではこれまでも学士課程において学修成果目標を定め、目標達成のためのカリキュラム改革として初年次に能動的な学びへの転換を目標としたアクティブ・ラーニング科目「初年次ゼミナール」を必修科目として設置し、学修成果把握のため学生調査を継続的に実施してきました。しかし、授業外学習時間は微増に留まり、GPA が知識習得以外の学修成果との相関が小さいこと等の課題が顕在化しています。

これらの課題を解決するため、本プログラムではアクティブ・ラーニング科目を専門教育においても体系的に位置づけ、反転授業を特定学域で先行導入し全学に拡大することを目指しています。また、成績評価にルーブリック評価を採用し、知識修得以外の能力が GPA に反映できる成績評価方法の開発も行います。さらに、ラーニングコモンズでの学修支援を充実し、学生調査と学生ポートフォリオから学修成果目標の達成度の測定も行います。最終的には GPA が学修成果と連動する学士課程教育の実現を目指すという壮大なプログラムです。今年度は、総合リハビリテーション学類、知識情報システム学類、環境システム学類での専門科目でのアクティブ・ラーニング授業の導入、ラーニングコモンズへの TA の導入検討、学修成果把握のためのジェネリックスキル測定テスト (Prog) の試行などを実施しました。

【詳細はこちらに掲載しています。】
<http://www.ap.osakafu-u.ac.jp/>

印刷物、メール発行

名称	内 容	発行月
「フォーラム」第23号	巻頭言、コラム、授業報告、新任教員 FD 研修報告、学生調査データ分析報告、学生 FD スタッフ活動報告	2014/7
「フォーラム」第24号	巻頭言、コラム、授業報告、大学教育再生加速プログラム (AP) 採択までの道程、学生調査データ分析報告、「学生 FD サミット 2014 夏」参加報告	2014/12
「フォーラム」第25号	巻頭言、コラム、授業報告、学生調査データ分析報告、学生 FD スタッフ活動報告、2014 年度活動報告	2015/3
「ニュースメール」配信	センターの活動予定・報告、センターウェブページの紹介、FD・SD 関連研究集会等のお知らせなど	全5回配信

『課程相談会』実施報告

学生
FDスタッフ
活動

現代システム科学域、工学域、生命環境科学域では、学類の中で、2年次に、より専門的な学習をするために、課程に配属されます。

課程配属を控えた1年次生に「なぜ、大学で勉強をするのか」「大学でどのようなことを学びたいのか」を再度考えてもらい、学習へのモチベーションを高め自発的な学習へつなげる事を目的として、各課程の先輩に直接質問できる機会を設け、先輩の生の意見を聞いてもらうとともに、課程配属に対する疑問や不安を解消してもらう相談会を学生 FD スタッフの企画で実施しました。

工学域物質化学系学類 三年生 溝口祐樹

学生 FD スタッフでは、課程配属(学類配属)を控えた1年生を対象に、11月下旬から12月下旬にかけて、9回の課程相談会を実施した。各課程から上級生に参加していただき、前半に十数名の座談会、後半に個別相談会という形式で開催した。全日程を通して、50名の1年生が参加、内46名から事後アンケートの回答を得た。

対象とした学生数から見れば決して参加人数が多いとは言えないが、座談会、個別相談会とともに積極的に質問する1年生の姿が見られた。当日実施したアンケートでは、ほとんどの学生から「よかった」との回答が得られた。特に、上級生の体験談、個人的な質問、課程の雰囲気、2年次以降の授業の内容などを聞くことができた点がよかったと回答している学生が多く、「上級生だから質問しやすかった」との意見もあった。また、6割以上の学生が「課程相談会に参加して課程配属に対する考え方が変わった」と回答しており、課程相談会が1年生にとって、課程配属を考えるよい機会になったのではないと思われる。

課程相談会は今回が初めての試みであった。そのため、1年生にその存在や内容について十分に周知することが難しかった。次年度以降も開催するのであれば、開催時期も含めどのように実施するのかについて検討を行う必要があると思われる。可能であるならば、今年度の経験を生かし、次年度以降も開催したいと考えている。



編集後記

今号の巻頭言を執筆いただいた山口義久先生が、3月末で定年退職とされます。山口先生は、高等教育開発センター設置当初より10年にわたりセンター所員として、センター運営と教育改善のための取り組みにご尽力いただきました。感謝申し上げます。

さて、本センターでは学生の授業外学習時間を増加させるための方策について検討を進めています。学生調査結果からも、授業振り返り(ポートフォリオ)の集計でも、府大生の2/3は1週間あたり5時間未満しか授業外学習をしていないとのデータが出ています。1週間あたり1時間未満と回答する学生も10%以上います。府大で学ぶ学生として必要とされる学習量を確保するため、授業方法の工夫や、教員・学生の意識改革が求められます。(深野)

大阪府立大学 高等教育開発センター センターニュース「フォーラム」

平成27年3月31日発行

発行者 公立大学法人 大阪府立大学
高等教育推進機構 高等教育開発センター
〒599-8531 大阪府堺市中区学園町1-1
<http://www.fd.las.osakafu-u.ac.jp/>

印刷所 くすの木印刷
〒586-0081 大阪府河内長野市緑ヶ丘北町25-21

<編集委員> 新井 隆景(センター長) 小島 篤博 高根 雅啓 高橋 哲也 谷口 栄一 車 美愛 塚本 民雄 畑野 快 林 利治
深野 政之(主任) 星野 聡孝(副センター長) ペピン ハンス・ヨアヒム 松坂 裕之 水鳥 能伸 溝上 慎一 山口 義久
<事務担当> 松室 光 岩上 由紀 長尾 智香子 藤岡 真弓